



東京地本再建の苦闘を学び、 組合員と共に新たな JR東労組をつくり出そう！

東京地本の柳委員長と佐藤中央執行委員長に再建の道のりや今後についてお話を聞きました。
(聞き手・情宣部)

I・東京地本の再建について

情宣部：8月22日の東京地本再建大会を開催するまでのお話を聞かせてください。

柳：2月10日の脱退・分裂という事態を受けて、東京地本派遣に指定され、それ以降、私と熊谷君は協力者もいない中、まずは地本事務所を取り戻すことからスタートしました。やっこの思いで事務所に入ると、パソコンもなければ、これまで発行されている指令・指示の文書、共有するデータ類、この間の交渉議事録なども全て消去されていました。パソコン以外にも多くのものが持ち去られていて、事務作業もできない状況でした。しかし、電話はかかってきます。脱退したいのだけれどもどのような手続きが必要なのか、共済の手続きはどうしたらいいのか、という組合員からの問い合わせのみならず、支払いが滞っているからお金を払ってほしいという電話で、今までどのようにやってきたのかも分からない中、電気・水道・ガス、レンタル料金の支払いなども対応してきました。

情宣部：どのように組織を立て直していったのですか。

柳：ほとんどの機関役員がいなくなり、支部も機能していないため、指令・指示を出したとしても組合員に届かないという状況で、どのように連絡を取っていいのかも分からないのが現実でした。そのような中4月になり、分会の書庫、

掲示板の使用許可願が提出されていないので返却して欲しいと会社から言われま

した。脱退によって責任者がいない状況となっていたのです。いくつかの分会では責任者になってくれる組合員がいましたが、そうならなかった職場も発生してしまい、組合員が10名以上いる分会にも関わらず掲示板や書庫を失う、片付けに行かなければならなかったことは非常に辛かったです。

その一方で、共済などの手続きの関係で地本に来てくれる人たちが現れてきました。その方たちとお弁当を食べながら意見交換をする中で職場現実を話していたのが、唯一できる取り組みでした。手探りで細々と関係をつくっていくしかありませんでした。

再建大会を何としても開催したいと当初から考えていましたが、どのようにして開催したらいいのか非常に悩みました。しかし、職場に入り、職場の声を聞いて、初めて本部や地本、支部、分会の信頼関係や、18春闘以降の認識のズレの大きさに驚かされ、地本執行部を立ち上げてきちんと組合員と意見を交換できる場所、場面をつくるしかないと思うようになっていきました。そこで何人かの仲間を声をかけ、人づてにメンバーを拡大しつつ、初めて会う人もいきましたが、この状況を何とか立て直したいという議論を重ね、暫定執行部を確立



佐藤中央執行委員長 柳地本執行委員長

できたことが地本再建に向けた大きな一歩でした。

情宣部：暫定執行部を決定された方々は、地本旧執行部や本部に対してどのような思いを抱いていたのですか。

柳：旧東京地本に意見したことによって排除された人、地本方針に異を唱えたことがあったために役員を降ろされた人もいて、東京地本が排除したのだけれども本部もそれを了承していたんだろうという問題意識を持っていて、当初はとも私たちに協力するという状況にはなかったのが正直なところでした。ただ、今の状況では駄目だ、自分たちを排除した役員たちが組合員を引き連れウソと誤魔化しで脱退・新労組立ち上げという現状の中で、何とかJR東労組・組合員を守りたいという意識はかなりの強さがありました。そこが唯一のお互いの共通基盤であり、彼らが立ち上がったくれたのが私にとって一番力になりました。

情宣部：認識のズレを組合員の声から掴んだとお話がありましたが、どういう場面で

柳：初めて職場に入らせてもらった東京総合車両センター（東総セ）支部の集いです。集会で私が挨拶している途中に「こうなったのは本部の指導責任だ」と挨拶を遮り「あなたの言っていることは分裂組合に行ったら人たちが全く同じだ。職場の現実を全く分かっていない」と言われました。これは非常にショックでしたが、そのぐら

い本部・地本の役員を信頼していない現実だったのだと思います。私はさらに挨拶で、不正が発覚した人たちに対して返還請求をしている事実経過について述べたのですが「新鉄労が分裂したとき本部はたたかってくれなかった。職場にも来てくれなかった」と言われました。私は当時知らなかったと答えましたが「知らないということ自体が職場に来ないからだ」と言われ、非常に強い視線を感じました。しかし、私ほ

れが現実なのでここからスタートするしかないと思いつめて、現実を突破するしかないと思いつめて議論してきました。さらに「乗務員職場にいると東総セの気持ちは分からない、この職場はこの職場と比較しても最悪。会社の言ったことが成果として掲示される」「全く情報も入ってこない」「本部は6項目を丸飲みした」「制裁乱発で全て東京地本に責任を押し付けて専従させよとささない」と言われました。まさにこの2年間旧東京地本が言ってきたことが職場に浸透しているが故に、真実がなかなか伝わっていない、認識の違いが未だにあるということでした。

しかし今、東総セでJR東労組の旗を守っているのは、運車職場を経験してきている仲間たちです。他の職場を経験しているからこそ現在の職場に疑問を感じ、これを何とか変えたいという思いに駆られている。しかし誰も手を差し伸べてくれない。その現実の中で苦しんでいるということを私は感じました。

情宣部：実際に再建大会を開催していかがですか。

柳：再建大会には、各支部5名以上の代表員を出そうと暫定執行部で打ち合わせをしてスタートを切りました。指令・指示を出しても、機能している支部は、支社と東総セの2支部しかありませんので、各分会には指令・指示が徹底できません。よってホームページを活用して情報を発信し、

LINEなども通じて参加を呼びかけてきました。当日は50名を超える仲間が参加してくれました。支部役員がほしい中でこのような参加を勝ち取れたのは、何とか東京地本を立て直してほしいという組合員の願いがあったからだと思っています。

情宣部：コロナ禍の状況も踏まえ短時間の開催となった中、活発な発言があったそうですね。

柳：非常に厳しい発言もありましたが、再建大会に参加して大変喜んでいてという発言もありました。それはなぜかというと、話し合う場ができたということだと思います。特に東京地本はこの2年間、「緑の風」が配布されなかったり、一部の機関役員が事実と違うことを述べていましたので、話し合う場が出来た安心感、話し合いができるということに参加者全員で確認できたことが再建大会のポイントだったと思います。

発言は7名からありました。「ヒューマンズムを語りながら不当労働行為で脱退していった組合員に対して『あいつは自分が弱いから辞めたんだ』と罵る役員に対して違和感しかなかった」「自分自身も何度も抜けようと思ったけれども、組合は必要だから思い留まった」「やはり組合は第一組合でなければダメだ、数は力だから思い留まった」という発言や「この2年間は職場のことを全くしてくれなかった」「地本は本部にモノを申ししてほしい、本部も職場に来てほしい」とも言われています。地本や本部に対して様々な批判があるということとは、労働組合に対しての期待感の裏返しでもあると受け止め、職場の現実を変えるために共に奮闘することで、この2年間の溝を埋めていけるのではないかと考えています。

情宣部：再建大会には佐藤委員長も参加されていますが、いかがでしたか。
佐藤：2月10日以降、私自身も八王子派

遣になりましたが、職場の組合員の気持ちは同じだと痛感させられましたし、地本の再建というのは極めて困難な道だと改めて実感しています。

当時の水戸・東京・八王子地本では、JR東労組を脱退するのか、新労組に加入するのかの二択を迫っていました。JR東労組に加入していながらJR東労組を脱退するのかなど迫るということは、JRの労働運動の中でも悪質な組織破壊だと断言できます。

二択を迫った上に、組合員を色分けしていたことも判明しています。あえて言いますが、会社による「組合色」差別を当時の東京地本は問題にしていたと思います。ところが今回は組合が組合員を色分け、差別・選別というのはあってはならないことですし、それは労働組合とは言えないと思います。

再建大会は、コロナ禍という条件の中でしたが50名を超える組合員が参加され、感染拡大防止のため懇親会で語り合う場は作られませんでした。意見を言う、集まるという一つの段階としてつくり出したことは大きかったと思います。7名の発言は、これまで情報等が統制された中で生み出されたJR東労組への不信感や疑問、疑念などが率直に出されましたし、私たちも包み隠さずに出し合い、これからも意見交換していきたいと思っています。東京地本の組合員と中央本部も一緒に歩んでいきます。

情宣部：先ほども少し発言について紹介いただきましたが、他にもご紹介いただけますか。
柳：若い組合員が「返還請求だとかやっているけれども正直引いてしまふ。役員を経験していない組合員が返還請求をしていることに対して向こうの役員からいろいろ言われることについては非常に困っている」と発言し、「自分たちは少しでも仕事をしやすくなるために今日は来たんだ」とも言っていました。